

### 3 血管柄付き遊離皮弁による口腔癌再建手術に対する周術期口腔機能管理の有用性に関する検討

田中 彰\*\*\*・五十嵐隆一\*\*\*  
鈴木見奈子\*\*\*\*\*\*・山口 晃\*  
又賀 泉\*\*\*

日本歯科大学新潟病院口腔外科\*  
同 口腔ケアセンター\*\*  
日本歯科大学新潟生命歯学部  
口腔外科学講座\*\*\*

2012年4月の診療報酬改定で、周術期等の口腔機能管理が保険収載され、急性期病院における医科と歯科の連携の重要性が増している。当科では、2006年4月より周術期専門的口腔ケアを本格的に導入し、すべての全身麻酔手術症例で施行している。そこで、感染リスクが高いとされる血管柄付き皮弁による口腔癌再建手術における周術期専門的口腔ケアの有用性について血管柄付き遊離皮弁や遊離骨皮弁を用いて再建手術を施行した口腔癌症例26例(ケア群)と、それ以前のケア未施行で同等の手術を施行した22例(未施行群)を対象に検討した。術後創部感染が、未施行群では7例(31.8%)に認められたのに対し、ケア施行群では2例(7.7%)で有意に少ない結果が認められた。またケア施行群では術後在院日数において約9日間の短縮が認められた。

口腔癌再建手術において、統計学的に周術期口腔ケアが感染リスク軽減を促す要因の1つであることが示唆された。

### 4 上顎歯肉扁平上皮癌の頸部転移様相

新垣 晋・金丸 祥平・船山 昭典  
新美 奏恵・小田 陽平・三上 俊彦  
菅井登志子・齊藤 力・星名 秀行\*  
永田 昌毅\*・高木 律男\*

新潟大学大学院医歯学総合研究科  
顎顔面再建学講座組織再建口腔  
外科学分野  
同 口腔健康科学講座顎顔面口腔  
外科学分野\*

上顎歯肉扁平上皮癌の頸部転移様相と転移に関連する因子について報告する。対象は上顎歯肉扁平上皮癌61症例で、転移頻度、転移部位、転移個数、また抜歯の有無、腫瘍の占拠部位、T病期、骨浸潤の有無、および分化度と頸部リンパ節転移との関連性について検討した。頸部リンパ節転移は後発転移を含め30例(49%)に認められ、転移部位はLevel1 41%、Level2 54%、Level3が4%で上頸部に局限していた。転移個数は1個から6個であった。転移に関連する因子では、抜歯(有:無; 58%:47%)、占拠部位(前方:側方:後方; 53%:36%:53%)、T病期(T1:T2:T3:T4; 28%:67%:17%:50%)、骨浸潤(有:無; 59%:23%)、分化度(G1:G2:G3; 38%:42%:78%)であり、骨浸潤の有無と分化度が頸部転移と関連する因子であった。61症例の5年累積生存率は69%であった。

### 5 当科におけるプロヴォックス手術の現状

佐藤雄一郎・山崎 洋大・小木 学

県立がんセンター新潟病院頭頸部外科

喉頭全摘は1873年にBillrothが初めて成功した術式である。喉頭、下咽頭癌に効果的な治療法だが、発声機能、鼻呼吸、嗅覚の喪失などの合併症は重篤である。当科では2007年4月より喉頭下咽頭癌の根治と機能温存の両立をテーマに各種治療法を導入してきた。従来からの放射線化学療法に喉頭温存下咽頭部分切除、喉頭垂直部分切除、CHEPを加え患者のQOL維持に努めている。